江南地域の埴輪と埴輪窯について　2019.12.7 於　立正大学博物館

熊谷市立江南文化財センター　新井　端

１.背景　江南台地は埼玉県の北部、ほぼ荒川の東流する位置に開けた右岸洪積台地で、寄居町折原付近から熊谷市楊井付近まで約 20 ㎞続く標高 60ｍ～30ｍの平坦地である。荒川に面する北縁は 20～10ｍ程の段丘崖となり、荒川を介して左岸側は櫛挽台地となる。江南台地の中央付近が旧江南町の所在した江南地域で、和田吉野川の支流が幾筋もの開析谷を発達させている。旧石器時代以降これらの小谷津に面して拠点となる集落や古墳群が造られている。江南地域からおよそ 15 ㎞圏内を概観すると、東側は元荒川を介してさきたま古墳群へ続く低地帯となり、縄文時代後期以降の集落などが自然堤防上に所在している。

南部は比企丘陵に接し開析谷に面した小丘陵部に集落や古墳群が散在する。中でも雷電山古墳を主墳とした三千塚古墳群が最大規模である。北側は櫛挽台地縁辺に分布する三ヶ尻古墳群があり、台地縁から妻沼低地へ移行し中条地区の自然堤防上には中条古墳群や集落が濃密に分布する。埴輪窯は江南台地の北縁に位置し荒川の流路を水上輸送に利用できる立地あった。地質学的には江南台地下には川本粘土層と呼ぶ白色粘土層が発達しており、原料土として採掘している。立地などの各条件に恵まれることに加え埴輪工人たちを統べる政治力を有した首長が近隣の埼玉にあったことも埴輪窯開窯の大きな要因と思われる。

2.古墳群の動態　埴輪を持つ古墳群は、窯に近接した姥ヶ沢を離れ 3 ㎞圏に、①塩、②古里,③小江川、5 ㎞圏に④野原、⑤三ヶ尻、⑥上原、⑦瀬戸山、⑧船川、⑨箱崎、⑩黒田、10 ㎞圏に⑪三千塚、⑫箕輪、⑬月輪、⑭大境、15 ㎞圏に⑮小前田、⑯中条、⑰飯塚、⑱さきたま、⑲岩鼻、⑳下道添(古凍)などの古墳群が知られる。これらの古墳群は江南地域の姥ヶ沢・権現坂の埴輪窯の供給先と想定している。これらの古墳群は主に二突帯三構成の円筒埴輪を有し、いずれも５世紀後半頃から出現する初期群集墳とされ、一部古墳時代後期の古墳群まで継続する。前記の中小規模の古墳群が主要な供給先と思われるが、大型円筒埴輪などの一部はさきたま古墳群などの地域の有力古墳にも供給していたと考えている。

3.姥ヶ沢埴輪窯跡と権現坂埴輪窯跡　姥ヶ沢窯跡は台地縁から侵入する谷合を約 200ｍ入り込んだ東斜面地(Ａ地点)に築窯されていた。1990 年に行われた発掘調査では窯体は下段４基、中段１基、上段３基の８基が並列しており、下段から上段に半地下式の窖窯が順次造られていた。窯床は 3～4 枚確認されることから数次にわたる操業が行われていたようだ。操業に際し祭事を行ったことを示す資料として剣・鏡・勾玉型の石製模造品や小型壺を持った窯(5 号窯)もあった。谷合地点とは別に台地崖線部(Ｂ地点)に埴輪窯が１基確認された。窯跡に近接して工房や粘土採掘坑などの遺構が見当たらなかったが、姥ヶ沢古墳群のあるＢ地点側に工房跡などが展開すると思われる。

権現坂窯跡は姥ヶ沢窯跡から東方 800ｍに位置し、小谷津を介して西側に並列する約 10 基の窯体を試掘調査により検出した。1960 年代に柳田敏司・大川清により小谷津の東側谷頭付近に検出された合計 7 基と推定される窯跡は発掘調査されている。1989 年には採土工事により工房跡・粘土採掘坑跡とこれを利用した八つ手状の窯も一部確認された。両窯跡は地点を異にして造られ、姥ヶ沢窯から権現坂窯に変遷したと推定され、およそ 5 世紀末から 6 世紀後半まで操業された比較的規模の大きい埴輪製作跡であったと考えている。

4.生産された埴輪の概要　姥ヶ沢窯に遺された人物埴輪片は巫女のみ、動物埴輪では馬・鹿がある。円筒埴輪は還元焔焼成のものがあるが、強い赤みを帯びた色調をするものが完成品と

思われる。この色調は権現坂窯の製品と同様で、原料とした粘土採掘坑が採取した白色粘土(川本粘土層)に含まれる鉄分の発色と思われる。円筒埴輪は二条突帯(三段構成)が主で平均的な大きさは高さ４５㎝、口径２５ｃｍほどで突帯間に１対の円孔が開けられる。円孔はやや大きめの印象を受ける。底径との差があまりなく筒状で口縁端部を外反させる。この円筒埴輪は姥ヶ沢窯の主要製品であろう。また、焼台使用の円筒埴輪は三条突帯(四段構成)の円筒埴輪と思われ、前段階での主要製品であったと思われる。

権現坂窯の円筒埴輪は、完存品では二条、三条、四条突帯を持つ各種の円筒埴輪や朝顔形埴輪が確認される。窯印と思われる刻線は「×」が姥ヶ沢窯と共通している。器財埴輪では靫・盾・翳・家形・大刀などがあり、人物では盾持人、力士、巫女、其の他人物の多数の破片が、動物では馬・鹿・猪などがみられる。これらの出土品や採取資料から六世紀代を通じて埴輪生産が行われたと思われる。なお、人物埴輪に付された腕の多くは中実又は中空技法により造られている。

5.埴輪の供給先　両窯跡から最短距離の古墳群へ供給するものと考えるが、姥ヶ沢窯産は、野原古墳群、塩古墳群西原支群、三ヶ尻古墳群、古里古墳群、月の輪古墳群、岩鼻古墳群、中条古墳群などが候補として挙げられる。これらの古墳群は多数の埴輪樹立を意図した初期群集墳が含まれている。中条古墳群の女塚・鎧塚には二条突帯(三段構成)と三条突帯(四段構成)の円筒埴輪が含まれており須恵質焼成・胎土・刻線・形態などに類似した特徴が観察される。

また、権現坂窯産の大型円筒埴輪などはさきたま古墳群中の瓦塚古墳・将軍塚古墳も候補の一つと考えている。

6.野原古墳群の埴輪　野原古墳群から出土した埴輪群は、野原字境田 24 番地と宮脇 108 番地に所在した 40m規模の前方後円墳の出土品が知られる以外ほとんどない。調査歴が少ない半面、盗掘などによる流出も少なくないのだろう。発見の発端は山林の開墾に際して多数の埴輪が出土した昭和 5 年Ⓐで、次は土取りに起因する発掘調査が行われた昭和 37 年Ⓑである。ⒶⒷは同一場所と推定する向きもあるが、別の古墳と思われる。出土した資料の大半は流出したため比較は容易ではなく、いずれの場合も発見状況などの詳細は不明と言わざるを得ない。発見地Ⓐと発掘地Ⓑから発見された埴輪の大半は、東京国立博物館・國學院大學と地元などに分散収蔵される。人物埴輪では「おどる人物」、「振り分け髪男子」、「巫女」、「笠を冠る人物」、「武装男子」、「人物の脚台部」、他に「馬」「槍」「翳」「大刀」などが知られる。人物埴輪の表情は多彩であり、今回紹介の人物埴輪は眼の表現が円孔、杏仁形、柳葉状、蒲鉾状ものが混在している。対象人物による意匠の違いか、他の古墳から出土した時期の異なるものが混ざっているようだ。朝顔型円筒埴輪は肩部まで三段であるが、円筒埴輪は全体を知る破片がなく、形象埴輪基部の円筒部破片が複数残されている。

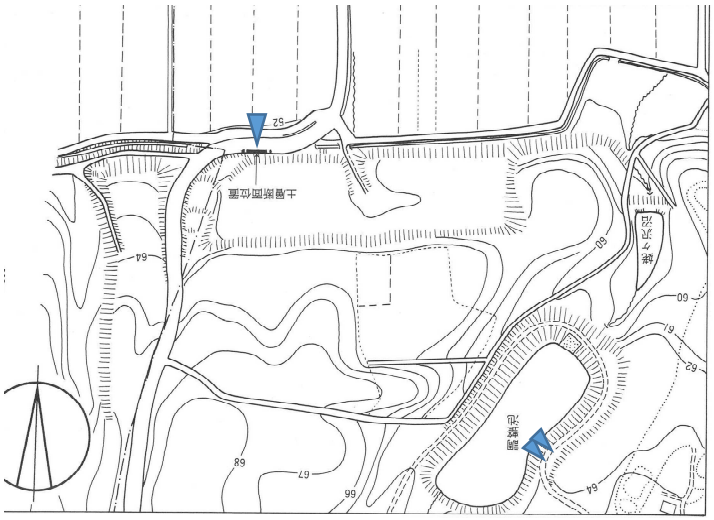
昭和 39 年には立正大学の坂詰秀一により円墳８基の主体部が発掘調査された。報告ではこれらの円墳は６世紀末から７世紀代の築造とされ、２基の円墳から埴輪片が採取されたというが対象古墳では埴輪の樹立はほとんどなかったようである。野原古墳群の埴輪は広く知られるがその調査研究には課題が多い。

【参考文献　―遺跡発掘報告書以外の図書等―】

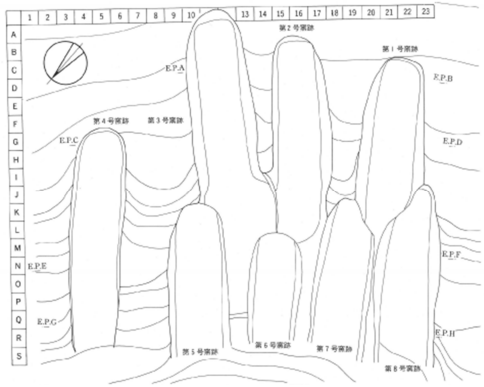
塩野博 2004『埼玉の古墳』「北足立・入間、比企・秩父、児玉、大里、北埼玉・南埼玉・北葛飾」

江南町 1995『江南町史資料編１考古』　・　江南町 2004『江南町史通史編　上巻』

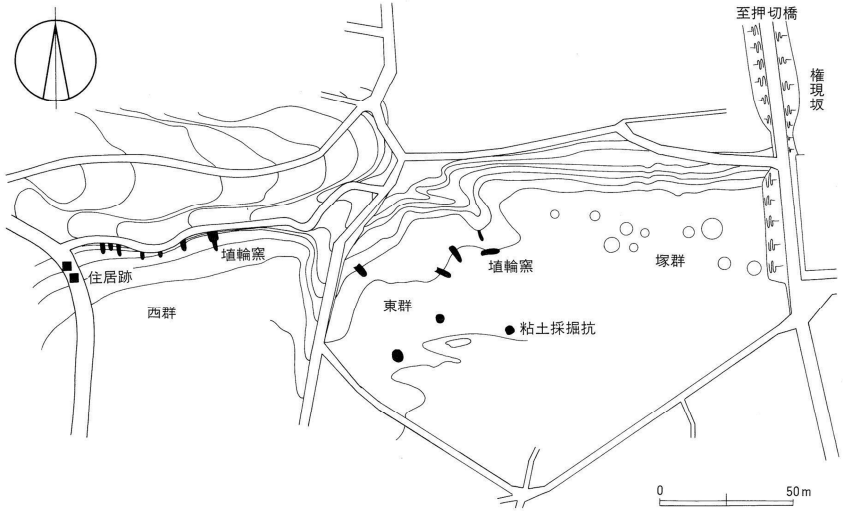
※熊谷市が調査主体となった発掘調査報告書はインターネット「熊谷デジタルミュージアム」「全国遺跡報告総覧」などから閲覧することができます。



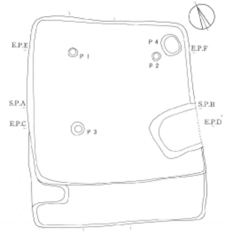
1—姥ケ沢窯跡位置図　▼印、窯の位置



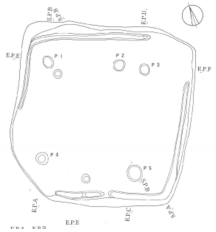
2—姥ケ沢窯跡１～８号窯跡



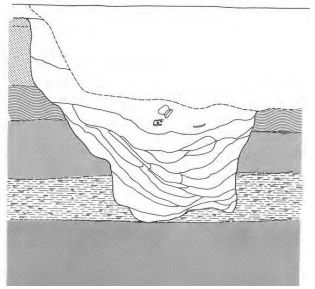
3—権現坂窯跡位置図



4—工房跡２号

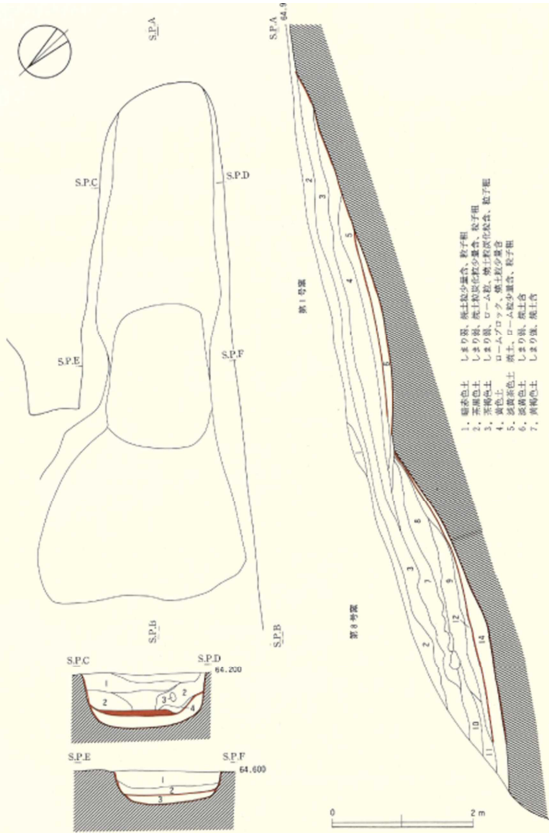


5—工房跡３号

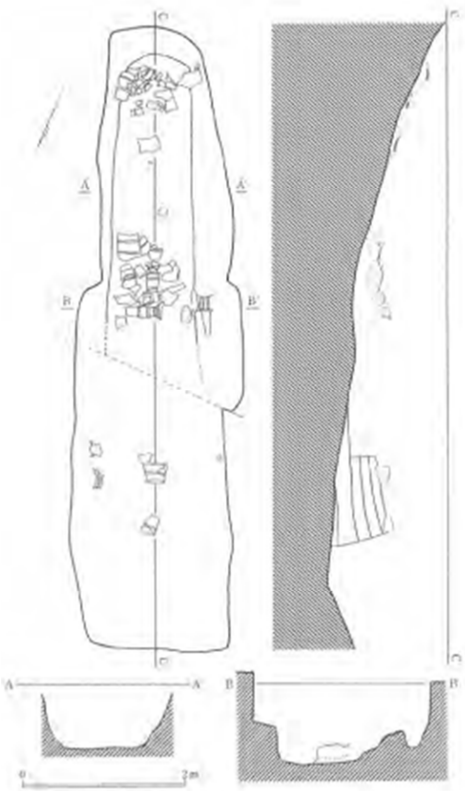


9—粘土採掘坑

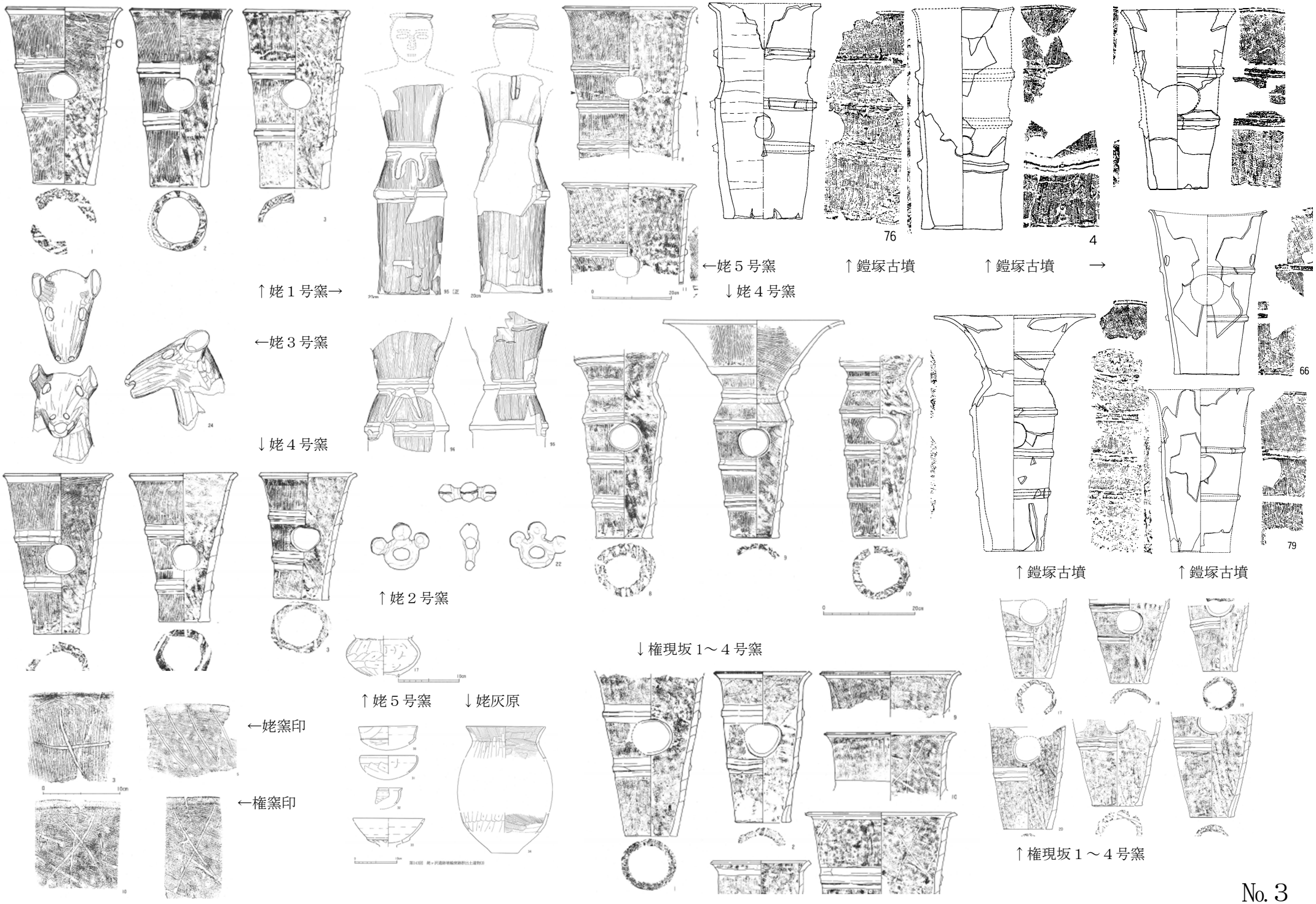
6—姥ケ沢１号窯跡遺物出土図



7—姥ケ沢１号窯跡平面・土層図



8—権現坂２号窯跡平面・土層図


↑姥１号窯→
←姥３号窯
↓姥４号窯
↑姥２号窯
↑姥５号窯
↓姥灰原
←姥窯印
←権窯印
←姥５号窯
↓姥４号窯
↑鎧塚古墳
↑鎧塚古墳
→
↓権現坂１～４号窯
↑鎧塚古墳
↑鎧塚古墳
↑権現坂１～４号窯

No. 3